
最弱勇者

ねむこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最弱勇者

【著者名】

ねむ二

【ISBN】

N4861Z

【あらすじ】

わたしは魔王を倒す勇者としてこっちの世界に召喚された。

こっちの世界には王様だけが使える召喚と送還の魔法があつて、あつちとこっちの行き来は結構簡単だった。

そしてついに、わたしは仲間たちと力を合わせて魔王を倒すことに成功した。でも・・・仲間たちがちょっとおかしくなつて

わたしは勇者。

あっちの世界といつちの世界を行き来して、少しづつ冒険を進めてた。

そして昨日。

お約束通りの美形な仲間たちと力を合わせ、お約束通りの美形な魔王を討ち取ることに成功したのだ。

だから昨夜は目的の達成感と、これで帰れるといつ安堵感から仲間たちとお祭り騒ぎをして眠りについた。

これでもう呼ばれることは無いと思つ。こいつの世界に必要だったのは“魔王を倒せる勇者”だったのだから。

魔王のいない世界にわたしは必要ない。

あとは王様に会つてあっちの世界に帰してもいい。それだけだつた。

ううつ、と呻きながら目が覚めた。

はめを外しすぎたのか頭がずきずきする。

痛む頭に片手をあてぼんやりと目を開けば、そこは暗くて空氣の停滞した様子に室内と見当をつけた。

ゆっくりと上半身を起こし、月明かりも何もないのに微かに見える床を目を凝らして見つめる。

見えたのは木田で、30センチほど離れたところへ向かってそりそりと暗くなつていぐ。

手の平と体の下に感じる、柔らかな敷物の下が硬い床だということは心のどこかでわかつてた。

ようよると立ち上がり、壁を探そうと手を伸ばす。

伸ばした指先が翳つて見えて、その様子に体を見下ろせば、わずかな明かりの下にぐらぐらには闇の中でドレスが白く浮かび上がっていた。

ドレス？

まじまじと見下ろし、着た覚えのないシンプルなドレスをつまむ。もしかして魔王を倒したご褒美？と思つてから、それはないと首を振つた。

それにこれでは暗闇に浮かび上がる亡靈ではないか。
きっとあの二人のドックリだ。

あこづらはすぐ調子にのつてこんな悪ふざけをするんだから。
魔法の効きすぎる体質に辟易しながらはあーっとため息を吐いたとき、間近でコツ、と硬質な足音がして顔を上げた。

暗闇にゆつくりと現れた姿には飽きるくらい見覚えがある。
それは共に魔王を倒した仲間の一人。
ほつとして伸ばしかけた手が、止まる。
いつもと違う様子に伸ばしかけた手を戻した。

真面目な顔で田の前の男が一步近づいた。

「王はあなたがどれほど苦労したのかを知らない。」

緩く束ねた銀色の髪に青い瞳。

いつも元気づけてくれた、穏やかで冷静な最強の魔法使い。

「王はあなたがどんなに傷ついたのかも知らない。」

どきりと驚いて、右から聞こえた柔らかな声にそちらを振り向く。少し長めの榛色の髪に緑の瞳。

いつも温かく見守ってくれた、優しい兄のよつた最高位の癒術師。

「王はあなたがどれほど泣いたのかすら知らない。」

反対側から聞こえた落ち着いた低い声に慌てて振り返る。切り揃えた長い金髪に灰色の瞳。

いつも傍にいて守ってくれた、勇敢で恐れを知らない最上の騎士。

「そして、お前がどれほど弱いかと。」

背後から聞こえた聞き覚えのある声に、恐る恐る振り返る。燃えるように波打つ赤い髪と感情の読み取れない金色の瞳。

倒したはずの、魔王。

「どう、して……？」

呆然ともれたその咳きに後ろで魔法使いがくすっと笑った。

「私が提案して、彼にも協力してもらつたんです。」

横に並び、注意をひくよつに魔法使いの指先が動くと、そこを中心とするよつに徐々に周囲が明るくなつていく。

柔らかで温かそうな毛布。

毛足の長い絨毯。

天蓋つきの大きなベッド。

石造りの壁。

鉄格子のついた嵌め込み窓。

開いた扉にぶら下がつた大きな錠前。

そして床一杯に描かれた魔法陣。

思わず一步踏み出して見た窓の向いには、抜けるよつな青空と眼下に広がる藍色の海だつた。

「なんで・・・」

わたしはあつちの世界に帰るのよ。

今までと同じように世界へ帰るの。

「王への報告は済んでる。あなたは魔王と相打ちになつたと。」「あなたを娶るつもりだった王は大変残念そうでしたよ。」

騎士と魔法使いの言葉に一人をゆつくり振り返る。

王様しか使えない召喚と送還の魔法。

王様にその気がなかつたなら・・・

それじゃあわたし、もう帰れない？

少しだけ呼吸が速くなつて強く胸を押される。

「心配しないで？」

癒術師が一步近づいて、わたしの空いた右手に優しく触れる。術を使つたのか、少しだけ落ち着いた。

「あなたのことは僕たちが一番わかっているから。」

その手をそつと引き上げ軽く口付けを落とすと、頬擦りをするように頬をあてて癒術師は微笑んだ。

その底知れなさに、思わず背筋が震えて手を引き抜こうと力をこめたがびくともしない。

背中を這い上がる何かと焦りで、少しでも距離をとるうとした体が何かにぶつかつた。

壁とは違つ感触にはつと振り返る。

「また落ちてたんだな。」

毛布を拾い、仕方ないと困つたように微笑む騎士は普段と変わらないように見えたが、みんながおかしい！と言つ前に毛布ごと強引

に抱きかかえられる。

同時に癒術師に手を放され、落とされるなどないのはわかつても慌てて首に抱きついた。

「勇者はいつもベッドから落ちているのか？」
「ええ、彼女は少し寝相が悪いんです。」

呆れたような魔王に魔法使いが笑つて答える。
野宿のときは大変でしたと聞こえて、少し腹が立つて騎士の肩越しに一人を睨んでやると、一人が肩を竦めてお互にを見た。
なんだ、あの仲良し加減は。

天蓋つきの大きなベッドに丁寧に下ろされたけど、お礼を言つようと場面じゃないと思つ。

急いで毛布を剥ぐと、さつとみんなから距離をとつた。
開いた扉まで走ればたぶん逃げ切れる。
ちらつと扉までの距離を確認して、あれ？ 何だか眠く……え？
唐突に足先から力が抜けていつてベッドの上に倒れこむ。

「私たちはあなたが、あなたのことを何一つ知らない王のものになるのは我慢できなかつたんです。」「許してくれなくてかまわない。」「そのかわり僕たちがたくさん愛してあげるから。」「……すぐにあの王も忘れるだらう。」「

頬や手に感じる柔らかな感触と、どこか寂しそうな彼らの声を聞きながら重い体のままに意識も沈んでいく。

「なーんて。わたしがこんなことでくこたれると思つてるなら大間違いよ！絶対ここから脱出してやる！あんの变态わんこどもめつ！」

今日もガチャガチャと鎧を踏みつけながら、塔の外へと向かつて吼えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4861n/>

最弱勇者

2011年2月4日04時11分発行